



▶ 目 次

●理事長あいさつ	…………… 2P
●第 50 回日本肩関節学会学術集会 会長あいさつ	…………… 2P
●第 51 回・第 52 回 日本肩関節学会学術集会のお知らせ	…………… 3P
●「肩関節外科医を志す人たちへ」一肩の魅力を語る	…………… 4P
●学術論文紹介 (2021 年 Best Abstract 基礎・臨床論文)	…………… 7P
●トラベリングフェロー帰朝報告	…………… 9P
・ SECEC-JSS トラベリングフェロー帰朝報告	
・ ASES-JSS トラベリングフェロー帰朝報告	
●各委員会報告	……………13P
・ 雑誌「肩関節」編集委員会	
・ 国際委員会	
・ 高岸直人賞決定委員会	
・ 社会保険等委員会	
・ 教育研修委員会	
・ 学術委員会	
・ 広報委員会	
・ 財務委員会	
・ リバース型人工肩関節運用委員会	
・ 日本肩の運動機能研究会運営委員会	
・ 選挙管理委員会	
・ 50 年史編纂委員会	
・ 用語委員会	
●事務局からのお知らせ	……………22P
●編集後記	……………22P

▶ 理事長あいさつ

一般社団法人 日本肩関節学会 理事長 菅谷啓之



昨年10月6日に第5代理事を拝命してから既に8か月が経過しようとしております。この間、2023年1月16日に第2回理事会を開催し、4月3日に第3回理事会を開催する予定でしたが、3月中旬に事務手続き上の不手際から当法人がみなし法人に降格されるという不測の事態が発覚しました。急遽臨時理事会を招集しこの問題について討議し、関係各方面に確認したところ、役員を再選任して指定期日内に登記を行えば再度一般社団法人としての活動が認められることが判明したため、4月2日に臨時社員総会を開催し、上述の緊急措置の施行と理事の再任について代議員の皆様への承認を何とか得ることができ、翌日の臨時理事会にて再度私が理事長に選任され、事実上は大きな混乱もなく事態の收拾を図ることができました。今回の一連

の事態は、事務手続き上の問題とはいえ、代議員をはじめ学会員の皆様に多大なるご迷惑をおかけしてしまったこと、深くお詫び申し上げます。

さて、5月8日には遂にコロナが感染症分類で5類に降格され、コロナ禍前の正常な日常が戻りつつあります。未曾有の円安やロシアのウクライナ侵攻などの影響により、日本から海外への渡航費はコロナ前に比べるとかなり割高ではありますが、トラベリングフェローや国際学会などの国際交流も再開されるようになりました。このような中、筒井廣明名誉会員の提案で、理事会では故信原克哉先生のご尽力の賜物でもあるアジア肩関節学会(ASEA)の扱いと日本肩関節学会の立ち位置について審議が行われました。その結果、今後は日本肩関節学会が率先してASEAに関わっていくこと、ホームページを日本肩関節学会のサイト内に置き、その管理と情報発信に関してはASEAの事務局である東北大学の山本宜幸先生と私が責任をもって行っていくことが承認されましたこと、代議員、学会員の皆様にご報告申し上げます。

最後に、第50回を迎える秋の日本肩関節学会の準備が池上博泰会長のもと、現在着々と進められております。記念すべき節目の学術集会在大盛會裏に終われるよう、皆様どうぞ御協力の程お願い申し上げます。

▶ 第50回日本肩関節学会学術集會会長 あいさつ

第50回日本肩関節学会学術集會 会長

東邦大学 医学部整形外科学講座 教授 池上博泰



この度、第50回日本肩関節学会学術集會を2023年10月13日(金)・14日(土)の2日間、新宿の京王プラザホテルにおいて開催させていただきます。第50回学術集會を主宰できることはこのうえない光栄であり、その重責と使命を重く感じております。本学会が実り多き学会となり、肩関節疾患・外傷の治療の更なる発展につながるよう誠心誠意努力してまいる所存です。

5月8日から新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが5類感染症になりました。このため、第50回は現地でのFace to faceを通常規模で行えるように鋭意準備をしております。

今回の学会のテーマは“Standing on the shoulders of giants(巨人の肩の上



に立つ)”としました。アイザック・ニュートンが同じ科学者であるロバート・フックへ当てた手紙の中で、(If I have seen further it is by standing on the shoulders of giants.)と書いて有名になった言葉です。この起源は12世紀のフランスの哲学者であるシャルトルのベルナルドゥスの言葉といわれています。

この50年の歴史の中で先人が作り上げてきた本会の歴史を踏まえて、未来に目を向けた斬新な発想に基づく研究成果を自由に発表して討論していただける会となるように努めます。肩関節の治療には、リハビリテーションスタッフ、看護師との連携も極めて重要です。併設の日本肩の運動機能研究会を含め、メディカルスタッフの方々にも積極的にご参加いただき、若手整形外科医、リハビリテーションスタッフ、看護師にとってより一層魅力ある学会にしたいと考えています。

みなさまのおかげで、600題を超える(日本肩関節学会と日本肩の運動機能研究会を併せて)一般演題登録をいただきました。現在、実りある学会となるよう鋭意プログラムを作成中であります。名誉会員で私の師匠である小川清久先生に特別講演を、日本肩関節学会と日本肩の運動機能研究会のCombined Sessionとして“凍結肩に対する理学療法とその限界”と“プロ野球における医師とトレーナーの役割”を企画しました。

また海外からは、米国フロリダ大学のProf. Thomas W. Wright先生、スイスベルン大学のProf. Matthias A. Zumstein先生、フランスパリInstitut de la MainのDr. Philippe Valenti先生、韓国ソウルSungkyunkwan大学のProf. Jae Chul Yoo先生(KSESのPresident)らが参加される予定です。

末筆になりますが、本学会の未来と学術集会の成功は本学会会員、特に今後の肩関節外科を牽引していく若い先生方の夢と情熱に委ねられています。多くの先生方の学会参加により本学術集会が実りあるものとなるよう、ご協力のほど何卒よろしく願いいたします。

肩関節を愛する多くの会員のみなさまのご参加をお待ちしております。

▶ 第51回・第52回 日本肩関節学会学術集会のお知らせ

第51回日本肩関節学会

学術集会会長：今井晋二(滋賀医科大学整形外科教室)

開催日時：2024年10月25日(金)～26日(土)(予定)

開催場所：京都(国立京都国際会館)(予定)

第52回日本肩関節学会

学術集会会長：伊崎輝昌(福岡大学筑紫病院 整形外科)

開催日時：2025年10月10日(金)～11日(土)(予定)

開催場所：福岡(福岡国際会議場)(予定)

▶ 「肩関節外科医を志す人たちへ」 一肩の魅力を語る

尾崎二郎整形外科東大寺前 尾崎二郎

肩の魅力は『Dynamic Stability』にある。

肩関節外科を志す先生方の前には、人の肩の持つ大きな可動域に対する『動的安定化機構』を追求する魅力が満ちて、『肩』には、まだまだ多くの開拓できる沃野が存在している。

上肢が前足として体を支え移動するための役割しか持たない動物では肩の可動域が悪い反面、安定性が良好である(図1・2・3)。

人は進化に伴ってものを作り出し、それを使用するための「手」と言う精密機器が高度な発達を遂げてきた。

そしてこの精密機器である「手」をできる限り広い三次元空間に「手」を支えながら動かす2点が人間の肩に課せられた命題である。

ヒトの肩は、肩可動域の高進と上肢支持性の獲得という、一見して相反する2つの機能的要素を見事に同居包含し得る動的安定化『Dynamic Stability』機構を獲得し得る関節構造に進化を遂げ、これを追求して行く事が肩の研究と診断・治療の魅力である。(図4・表1)

図1:

●漫画の世界のイヌは、ヒトと同じように「手」という精密機器が発達し、肩も「手」を最大限有効に活用するため可動性を高め上肢支持性をも満たすようになっているが、現実のイヌの肩は股関節と同じように、体を支え歩いたり走ったりする個体の支持と移動機能しかもたない。



図2: ザトウクジラの骨格

ザトウクジラの肩は水中を泳ぎ回るための機能を持ち、鎖骨は発達していない。

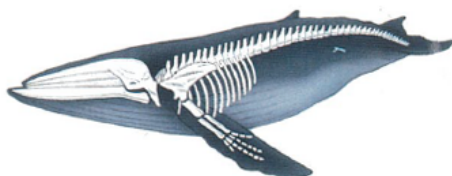


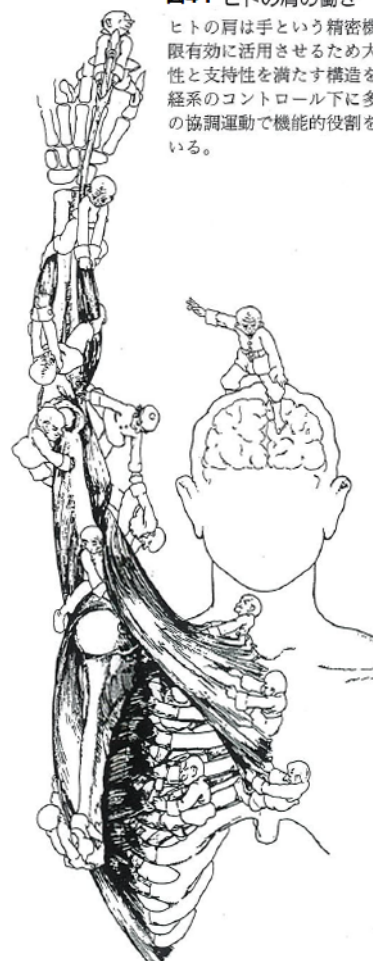
図3: プロントザウルスの骨格

プロントザウルスの肩は、巨大な体を支え移動させるための“前足”の土台としての機能しかもたない。鎖骨はみられない。



図4: ヒトの肩の動き

ヒトの肩は手という精密機器を最大限有効に活用させるため大きな可動性と支持性を満たす構造をもち、神経系のコントロール下に多くの筋群の協調運動で機能的役割を果たしている。



(Codman, E. A.: The shoulder. T. Todd., 1934. より引用)

表1: ヒトの肩の特徴

ヒトの肩は「手」という精密機器を最大限有効に活用させる役割を担う。
↓
①人体の関節の中で最も大きな可動域をもつ。 ②上肢の支持性をも満たす必要がある。
↓
上記の2点を満足させるように人間の肩は応用変化を遂げた(肩の動的安定性の発達)。
↓
①複合関節としての肩。 ②上腕骨頭に対応する肩甲骨の小さな関節窩。 ③腱板の発達 などの機能解剖から捉えた人間の肩の特徴がある。

図1、図2、図3、表1: 「肩: THE SHOULDER」1996、ありす aris より引用

私は今月(2023年5月)で医師になって丁度50年(半世紀)になります。医師になった50年前に、貪り読んだ3つの文献がその後の進路となりました。

1. 「Codman, E. A.: The Shoulder. Thomas Todd, Boston, 1934.」
2. 「Helfet, A. J: Coracoid transplantation for recurring dislocation of the shoulder. The Rowley Bristow operation. J.Bone Joint Surg. 40B:198.1958」
3. 「Dewar F.P. and Barrington, T.W: The treatment of chronic acromioclavicular dislocation. J.Bone Joint Surg, 47B: 32-35,1965.」

BristowとDewarはともにconjoined tendonをつけたまま烏口突起を鎖骨遠位端や肩甲骨関節窩前面に移行する術式で、肩鎖関節脱臼や反復性肩関節脱臼に対して“DYNAMIC”なメカニズムによる手術法で、肩の持つ“DYNAMIC STABILITY”を臨床応用した素晴らしい術式であると考え、当時強烈な衝撃を受けました。

そして50年経過した今でも、症例を選んでこの2つの手術を行っています。

そして肩には緩く不安定な肩「Unstable Loose Shoulder」と拘縮した肩「Frozen Shoulder」という相反する2つの病態・疾患が存在しています。

そこで私はGlenohumeral jointでのDYNAMIC STABILITYをコントロールしている1つの部位が「rotator interval: 腱板間隙部」にあると判断し、1986年と1989年に論文を出していますので、是非一読してください。(文献4、10)

肩関節の可動性を高め、またこの可動性を調節するための機構として、烏口上腕靭帯と腱板間隙部をあげることができ、その概略を図5・6に提示します。

肩の持つ“DYNAMIC STABILITY”はこの他にも様々な部位に、多くのメカニズムが内包されていますので、探求してください。

図5: 烏口上腕靭帯と腱板間隙部の構造

棘上筋腱と肩甲下筋腱の間は腱板間隙部とよばれ、烏口突起から大結節と小結節に烏口上腕靭帯があり、直下には上腕二頭筋長頭腱が走っている。この部位は肩関節の可動性と安定性に関与し、臨床的にも肩の抵抗減弱部位の1つでもある。

■ 烏口上腕靭帯
□ 腱板間隙部

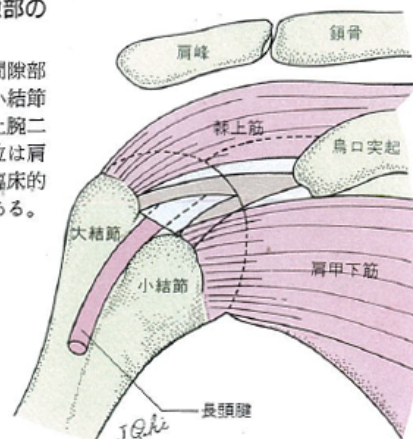


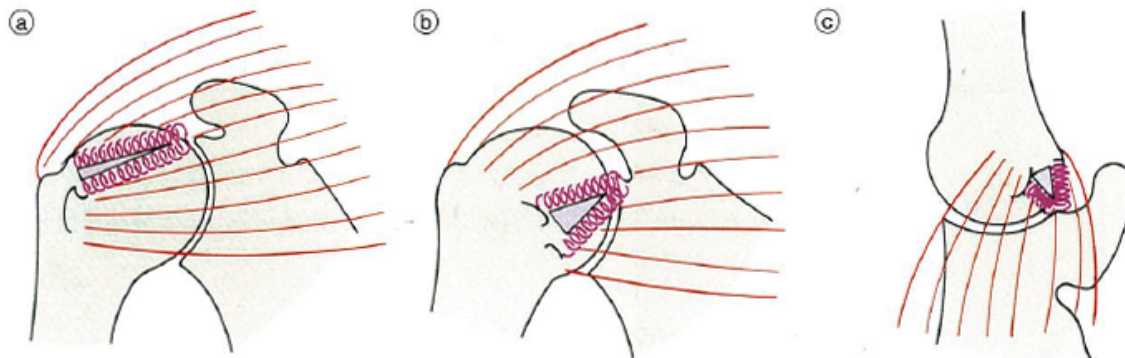
図6: 烏口上腕靭帯と腱板間隙部の機能

a : 肩関節外旋位では、烏口上腕靭帯は伸展し、腱板間隙部は前後方向で狭小化する。

b : 肩関節内旋位では烏口上腕靭帯は短縮し、腱板間隙部は前後方向で拡大する。

c : 最大挙上位では腱板間隙部が捻れ、烏口上腕靭帯は短縮する。

この部位は腱板間隙部が肩関節と上腕二頭筋長頭の可動性を高めるのに対し、烏口上腕靭帯は、肩関節と上腕二頭筋長頭腱の安定性を高め、全体として肩関節の可動性を制御していることになる。



■ 烏口上腕靭帯 □ 腱板間隙部

図5, 図6: 「肩: THE SHOULDER」1996、ありす aris より引用



これから肩関節外科医を志す先生方には是非、肩のもつ“DYNAMIC STABILITY”を楽しく興味を持って広く深く
耕していただきたいと願っています。

本原稿は私が自家出版として、「1996年5月に刊行した『肩 THE SHOULDER』ありす aris」から一部取り挙
げて作成し、下記にその原動力になった私の文献を記載させていただきますので一読頂ければ幸いです。

それでは皆様方のご健闘をお願い致します。

2023年5月吉日 尾崎二郎

(私の自家出版「肩：THE SHOULDER」1996. ありす aris」の原動力になった文献の一部

- 1.Ozaki, J. et al.:Tears of the rotator cuff of the shoulder associated with pathological changes in the acromion - A study in cadavera. J.Bone and Joint Surg., 70-A: 1224-1230, 1988.
- 2.Ozaki, J. et al.: Recalcitrant chronic adhesive capsulitis of the shoulder. Role of contracture of the coracohumeral ligament and rotator interval in pathogenesis and treatment. J.Bone and Joint Surg., 71-A: 1511-1515, 1989.
- 3.Ozaki, J. et al.: Reconstruction of chronic massive rotator cuff tears with synthetic materials. Clin. Orthop., 202 : 173-183, 1986.
- 4.Ozaki, J. et al.: Glenohumeral movements of the involuntary inferior and multidirectional instability. Clin. Orthop., 238: 107-111, 1989.
- 5.Ozaki, J. et al.: Surgical treatment for posterior ossifications of the glenoid in baseball players. J.Shoulder and Elbow Surg., 1:91-97,1992.
- 6.Ozaki, J. et al.: Tear of an ossified rotator cuff of the shoulder. A case of report. Acta Orthop Scand., 63: 339-340, 1992.
- 7.Ozaki, J. et al.: Synovial chondromatosis of the acromioclavicular joint. A case report. Arch. Orthop. Trauma Surg.,112: 152-154, 1993.
8. 尾崎二郎：Cineradiographyと挙上位X線像からみた肩関節の動態学的研究，日整会誌54: 1679-1692, 1980.
9. 尾崎二郎：いわゆる動揺性肩関節の病態について．臨床整形外科16：1161-1171, 1981.
10. 尾崎二郎：烏口上腕靭帯とrotator intervalの機能と病態について．臨床整形外科21:993-999, 1986.

▶ 学術論文紹介

Best Abstract2021 基礎論文

北里大学 医学部整形外科 田澤 諒

Increased nerve growth factor expression in the synovial tissues of patients with rotator cuff tears

Tazawa R, Kenmoku T, Uchida K, Arendt-Nielsen L, Nagura N, Nakawaki M, Matsumoto T, Inoue G, Takeuchi H, Jimbo T, Nakazawa T, Fukuda M, Takaso M.

Mol Pain. 2021 Jan-Dec;17:17448069211021252.

【背景】 腱板断裂患者の主訴の多くは疼痛だが、そのメカニズムはいまだ不明な点が多い。近年、運動器疼痛治療において NSAIDs の使用が見直される傾向にあり、新たな治療ターゲットとして神経成長因子 (nerve growth factor; NGF) が注目されている。本研究では、腱板断裂患者の滑膜組織における NGF および COX-2 発現と疼痛の関連性を検討した。

【方法】 鏡視下腱板縫合術を施行した腱板断裂患者 32 名 32 肩 (RCT 群) から肩峰下と関節内の滑膜組織を採取した。対照群として反復性肩関節脱臼患者 28 名 28 肩 (RSD 群) から関節内の滑膜組織を採取した。採取した滑膜組織における NGF および COX-2 発現を real time PCR 法で、NGF 濃度を Western blotting 法で検証し比較検討した。また滑膜組織における NGF および COX-2 発現と Numeric Rating Scale (NRS) の相関を検証した。

【結果】 RCT 群の関節内滑膜における NGF 発現、NGF 濃度ともに RSD 群と比較して有意に高値であった ($P=0.0017$, $P=0.012$, 図 1a)。一方、COX-2 発現は RCT 群と RSD 群との間に有意差は認めなかった (図 1b)。関節内滑膜における NGF 発現は NRS と正の相関を示した ($\rho = 0.38$, $P=0.004$, 図 2a)。一方、COX-2 発現と NRS に相関は認めなかった ($\rho = -0.006$, $P=0.97$, 図 2b)。

【考察および結論】 腱板断裂患者の滑膜組織では NGF 発現が上昇しており、疼痛スコアと相関を示した。抗 NGF 抗体は腰痛や変形性膝関節症の疼痛治療に有用であることが報告されている。本研究結果から、腱板断裂患者において NGF が治療ターゲットになる可能性があると考えられた。

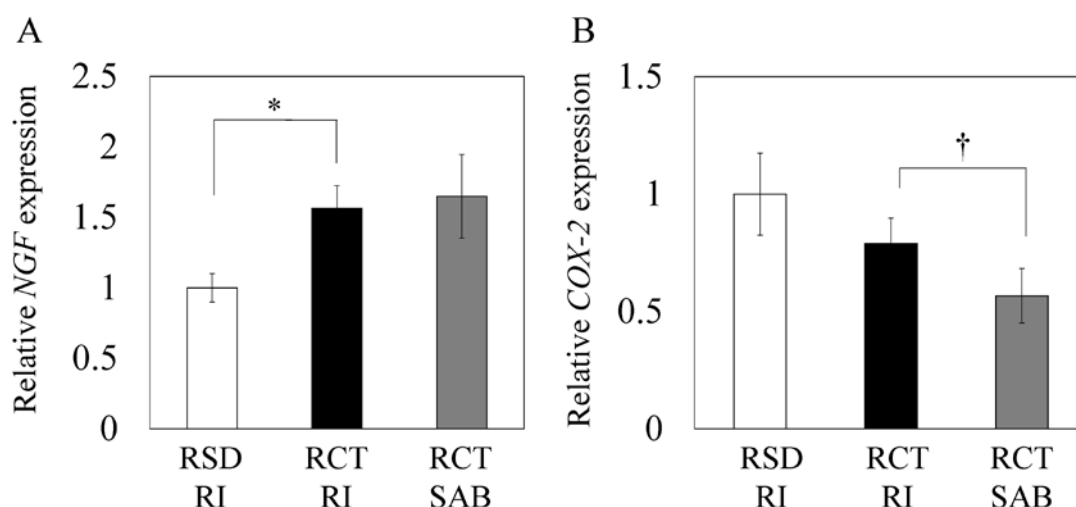


図 1. Real time PCR 法による滑膜組織における NGF (a) および COX-2 (b) 発現。

RI, rotator interval; SAB, subacromial bursa.

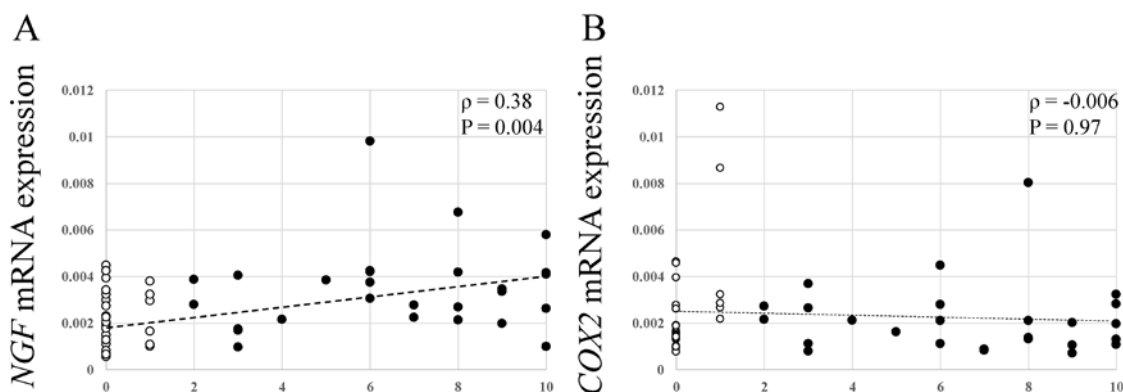


図 2. 関節内滑膜組織における疼痛 NRS と NGF (a) および COX-2 (b) 発現の相関。

Best Abstract2021 臨床論文

東北労災病院 整形外科 井樋栄二

Long-term effect of immobilization in external rotation after first-time shoulder dislocation: an average 18-year follow-up. J Shoulder Elbow Surg. 2022 Mar;31(3):601-607.

肩関節初回前方脱臼に対する外旋位固定の長期成績：平均 18 年の追跡調査

背景：肩関節初回前方脱臼に対する保存療法として、外旋位固定法の有用性が近年の統合解析によって示されている。我々は外旋位固定と内旋位固定を比較する多施設前向き無作為化臨床試験を行い、短期成績を報告した。本研究の目的は、両治療群の長期成績を比較することである。

対象：2000 年 10 月から 2004 年 3 月までの間に協力医療機関を受診した肩関節初回前方脱臼 198 例（平均年齢 28 歳）を無作為に外旋位固定 (ER) 群 104 例と内旋位固定 (IR) 群 94 例に割り振った。平均 2 年の短期調査ができたのは 159 例 (80.3%) であった。今回、この 159 例を対象に 2021 年 1 月から 4 月にかけて電話を用いて再調査を行った。調査項目は前回の調査後の再脱臼の有無、再脱臼に対する手術の有無、日常生活での脱臼不安感の有無、スポーツ復帰、可動域制限の有無、SANE スコアである。

結果：平均追跡期間は 18 年 (16 ~ 20 年) であり、追跡できた症例は ER 群 27 例、IR 群 29 例の 56 例 (追跡率 35%) であった。前回の調査時点から今回の調査までの間に新たな脱臼を経験したのは ER 群 6 例、IR 群 7 例であり、前回の調査時点での再脱臼も含めた再脱臼率は ER 群 33%、IR 群 55% であった ($p = 0.100$)。再脱臼に対して手術治療を受けた症例は ER 群 3 例 11%、IR 群 10 例 34% であり、IR 群で有意に多かった ($p = 0.038$)。保存療法の成績不良例 (手術例 + SANE スコア 70 点以下) は ER 群 (26%) で IR 群 (52%) より有意に少なかった ($p = 0.048$)。手術例を除外した症例の日常生活での不安感、スポーツ復帰、可動域制限、SANE スコアには有意差を認めなかった。

結語：外旋位固定は再脱臼を減らし、長期的にみて手術に移行する患者を減らすことができる。

Best Abstract とは

【Best Abstract について】

Best Abstract16 選考規定（学会賞（高岸直人賞）に関する規則 別則1）

当該年度学術集会の採択抄録を対象とする。

選考方法

- (1) 学術集会会長は、代議員査読ののち採択した演題のうち Best Abstract16 としてふさわしい演題 100 編程度(選考対象論文)を、委員会に推薦する。
- (2) 代議員は、選考対象論文から基礎論文 5 編、臨床論文 5 編を、Best Abstract16 推薦論文として委員長に報告する。
- (3) 委員長は、基礎論文、臨床論文のうち、得票数上位の論文各 8 編を Best Abstract16 として委員に通知する。
- (4) 最終選考枠が同票となった場合は、委員による投票で選考する。
- (5) 委員長は、選考結果を理事会に報告する。

高岸直人賞は、45 歳未満という年齢制限がありますが、Best Abstract には年齢制限はありません。選考された論文で希望者は、JSES(Journal of Shoulder and Elbow Surgery)に“AWARD-WINNING ABSTRACTS FROM THE JAPAN SHOULDER SOCIETY ANNUAL MEETING 20XX”として掲載されます。

今回は 2021 年の第 48 回日本肩関節学会学術集会の Best Abstract から 2 題を選ばせていただきました。

▶ トラベリングフェロー帰朝報告

SECEC-JSS トラベリングフェロー帰朝報告

きたかた整形外科クリニック 院長 大野洋平

2022 年 9 月から SECEC-JSS Traveling Fellow として 1 ヶ月間、欧州へ行って参りました。元々は 2020 年の Fellow にご選出頂いたのですが、COVID の影響で渡航 2 ヶ月前に延期が決まり、2 年越しでの開催です。

私ごとですが、2021 年 4 月に北海道帯広市で医院を開業致しました。本来ならまだ勤務医のうちに渡欧できたところ、コロナ延期で「開院 1 年半で院長が長期不在」という過酷な状況となり心が折れかけました。しかし、またとない機会ですし、繋がりのある先生方になり振り構わずご協力をお願いし、なんとか医院を閉めずに乗り切ることができました。助けて下さった先生方には頭が上がりません。

この Fellowship では、韓国肩肘学会からの Hyun-Seok Song 教授 (Catholic University) と共に、9 月 7 日 Dublin, Ireland での 30th SECEC annual meeting を皮切りに 10 月 6 日まで、計 8 ヶ国 8 医師を訪問しました。Song 教授と私で対象施設から選んだ希望リストを元に SECEC 事務局が旅程調整、飛行機・宿泊予約をしてくれる、という流れて、かなり大変な作業だったはずですが、SECEC の Sylvie に感謝です。

SECEC meeting 後に訪れた医師と都市を訪問順に列挙します。

Drs. Ofer Levy (Reading, UK), Just van der Linde (Zoetermeer, Netherlands), Emilio Calvo (Madrid, Spain), Alexandre Lädermann (Genève, Switzerland), Pietro Randelli (Milan, Italy), Alessandro Castagna (Milan, Italy), Philippe Collin (Rennes, France), Jörn Kircher (Hamburg, Germany) 3,4 日毎に移動するかなりタイトな旅程でした。

Fellowship 中に感じた欧州の手術に関する気付きを 2 点報告させて下さい。

①「術式の多様性」と「手技の巧拙」とは日本より広い幅を感じますが、手術内容として我々が引けをとることは特

にありません。結局は個人次第という印象です。

②最近 10 年、話題に上がることの多い SCR、鏡視下 Latarjet の症例を、1 例も見ませんでした。たまたまかも知れませんが、学会や論文と実臨床の間に乖離を感じます。

学術面に関しては、6 施設で自身の論文内容の発表・討論の場を頂いたのに加え、気の合った先生には「時間はあるので未完成の論文があれば手伝います」と強がって申し出ていたところ、3 本の論文に絡ませてもらえた上、Dr. Kircher の推薦で JSES の reviewer を仰せ付けられました。図々しいと感じられるかも知れませんが、これも Fellowship の醍醐味の一つで、形として残る大切な思い出です。

期間中、行動を共にした相方の Song 教授はとても良い人でしたが、話の中でフェロー選抜の基準が日本と韓国で全く異なることを知りました。日本では、選考の上とはいえ比較的若い中堅医師にチャンスが頂けますが、韓国では、学会上層部の重鎮から年功序列で順番が来るのだそうです。要はご褒美です。国ごとに考えが違って当然で、良い悪いというものではありませんが、若輩者の私にもこのような機会を与えて下さる日本肩関節学会の懐の深さを思い知りました。

最後になりますが、大学や勤務先の繋がりも無いのにご推薦下さった末永先生、選抜時にご審査頂いた国際委員会の先生方、繋ぎ役をして下さった事務局の川村さん、それから院長不在の医院を支えて下さった先生方とスタッフに、心から感謝を申し上げます。皆様のご協力無くしてこの Traveling Fellowship は成し得ませんでした。大変貴重な経験をさせて頂き、本当にありがとうございました。

※写真は今回の Fellowship 中に乗った乗り物です。



① Dr. Levy 所有の AutoGyro という 2 人乗り飛行機に乗せてもらいました。操縦は Dr. Levy 本人です。



② Milan で DUCATI を借りて峠に行きました。嬉しくて Dr. Castagna に写真つきで報告したのですが、直後の日本肩学会のご講演スライドでこの写真を出されていた、との噂を耳にしました。



③ Dr. Kircher の TRIUMPH にも乗らせてもらい、はしゃいでいます。



④ Geneve にて、問答無用で往復 30km の自転車通勤という貴重な体験をしました。左から Dr. Alex Lädermann, Dr. Song, 私の順です。

ASES-JSS トラベリングフェロー帰朝報告

大阪医科薬科大学 整形外科 長谷川彰彦

2022年9月25日から10月24日の4週間、JSS/ASES Travelling Fellowとして米国の7施設の訪問とASES annual meetingに参加する機会をいただきましたので、報告いたします。

今回はあらかじめ西海岸から東海岸へ向かって訪問先のプログラムを組んでいただいておりますが、ホテルとフライトは各自で予約というスタイルでしたので、北里大学の見目智紀先生と事前に電話で打ち合わせをして同じホテルとフライトを予約して出発しました。

最初の訪問先であるKerlan-Jobe Orthopedic ClinicのJohn Itamura先生には到着早々、夕食に連れて行っていただき、お渡しした手土産以上に多くのお土産をいただきました。また、あわせてThay Q Lee先生のラボを訪問する機会をいただき、これまでに論文で何度も拝見したcustom testing deviceを見せていただきました。

2番目の訪問先であるStanford Universityでは、Michael Freehill先生にVR(バーチャルリアリティ)を利用したStemless TSAの手術を見せていただきました。さらにはMarc Safran先生の運転でキャンパスツアーに連れて行ってもらいました。Stanford Universityはキャンパス内に野球場、フットボール場、テニスコート、プールなどが完備されており、オリンピックメダリストも数多く輩出している名門大学ですが、これに加えてキャンパス内にロダンの彫刻があったり、ステンドグラスの張られたイタリア風の教会があったりと、その規模とクオリティーに圧倒されました。

3番目の訪問先はSteadman clinicでした。Matthew Provencher先生の外来は若年者のOAやRevision caseなど難しい症例が盛りだくさんでしたが、にこやかに患者さんとコミュニケーションをとりながら解決策を提示される姿が印象的でした。また、ここではcadaver labでhuman dermal allograftを使用したSCRを経験させていただくことができました。human dermal allograftを扱うのは初めてでしたが、私たちが日頃使用している大腿筋膜グラフトとは大きく異なり、薄く、伸びやすいのに針は通りにくく、これを用いたSCRの成績が良くない理由が大変よくわかりました。

4番目の訪問先としてアトランタのASES annual meetingに参加しました。この学会はclosed meetingなのでメンバーしか参加できないのですが、今回traveling fellowshipの副賞?としてcorresponding memberに加えていただき、学会に参加することができました。

5番目の訪問先であるBaylor University Medical CenterではSumant "Butch" Krishnan先生が”超速”で手術を行っており、6:30から13:00までに10件のARCRを、また別の日には6:30から13:30までにsuperolateral approachでのRSAを6件(うち1件はrevision)を見せていただきました。

6番目の訪問先はUniversity of Pennsylvaniaで、ここではDavid Graser先生にキャンパスツアーに連れて行ってもらいました。さらに、腱に関する基礎研究では米国の第一人者であるSoslowsky先生のラボ見学をさせていただくことができました。Soslowsky先生のラボは全米屈指の規模で、ほとんどのstudyを一つのラボで完結できる素晴らしい施設でした。

7番目の訪問地、シカゴのRush Universityでは、Gregory Nicholson先生、Grant Garrigues先生、Nikhil N. Verma先生の手術を見学しましたが、ここでは関節鏡視下手術を中心に見学させてもらいました。

8番目(最後)の訪問地、New YorkのHospital for Special SurgeryではDavid Dines先生とLawrence Gulotta先生の手術を見学しました。RSAは要所を除いてfellowに執刀機会を与えており、後輩の指導の仕方も勉強になりました。最後にDavid Dines先生からメッセージ入りのテキストをいただき、4週間にわたるトラベリングフェローは終了しました。

今回のトラベリングフェロー中に見学した手術の多くは人工関節で、augmentationを追加した腱板手術やSCR、バルンスパーサーなどの手術を見る機会はありませんでした。しかし、7施設中6施設で講演の機会をいただき、

加えてカンファレンスやシンポジウムなどで異なる文化、保険制度の中で、普段とは違った角度から多くの意見交換ができたことは学会では得られない貴重な経験でした。

また、訪問先のどの施設でもホストの先生方から温かく歓迎していただき、もったいないくらいの素晴らしい待遇でおもてなしを受けました。これも全てこれまでに友好関係を築いて来られた肩学会の先輩方のおかげと感謝しております。

最後に、今回の traveling fellowship に際しましてご尽力いただきました日本肩関節学会理事長の菅谷啓之先生、国際委員長の三幡輝久先生、推薦状をいただきました山本宣幸先生、面接で選んでいただきました国際委員の先生方、事務局の川村さん、ご同行いただき私のわがままにつきあっていただいた見目智紀先生、長期出張を許可いただきました大学及び関連病院の先生方に深謝いたします。



Stanford University。Michael Freehill 先生（後列右）、Marc Safran 先生（前列右）とのキャンパスツアー。前列左が見目智紀先生、後列左が筆者。



Steadman clinic。Peter Millett 先生（左端）、Matthew Provencher 先生（右端）から certificate をいただきました。



Hospital for Special Surgery。David Dines 先生（中央）から textbook をいただきました。

ASES-JSS トラベリングフェロー帰朝報告

北里大学病院リハビリテーション科 北里大学医学部整形外科 見目智紀

2022年9月25日から10月24日の4週間に渡り、大阪医大の長谷川彰彦先生と一緒にアメリカで研修させて頂きました。我々のスケジュールは、Kerlan Jobe Clinic, Stanford Univ, Steadman Clinic, ASES Annual meeting @ Atlanta, Baylor Univ., Univ. of Pennsylvania, Rush Univ., Hospital for Special Surgeryを回る濃密なスケジュールでした。そんな日々を掻い摘んでご報告申し上げます。

アメリカの治療はリバースショルダー（以下リバース）全盛でした。腱板縫合は不全断裂ばかりで、典型的な縫合は数えるほどしか見ませんでした。アメリカの多数の施設を回るので、それぞれの施設で同じ質問して、得られた回答を比較しようと考えておりましたので、

Q1「なぜ腱板が残っているのにリバース？」

Q2「腱板残っている症例のリバースはやはり外旋が得意なの？」

二つの質問をしました。

Q1の回答は「縫合しても痛みが残る可能性が高い。そしてOAが進む。そのため、軟骨変性がある症例ではみんなリバース。」がほぼ全ての施設で得られました。

Q2の回答は「あまり変わらない。」という答えでした。 写真1

どうやらリバースの回旋可動域に関しては腱板筋の残存量はあまり関係無さそうです。

新しい技術としては、VRゴーグルを用いて手術中に患者さんの3D骨モデルを術野で確認しながら行う手術をStanford Univ.で見学しました。日本導入前の道具の手術を期待していたので、こちらは興味深かったです。(写真1)





写真2

現在の技術では、まだ同一視野に画像があるだけです。今後 Shape matching の技術を使えば、術野と VR 上の骨モデルを一致させてナビゲーションの様に人工関節の設置が可能になるのではないかと期待されました。技術の進歩に期待です。また、Walch B2, C などのリーミングをセンターに入れたガイドピン越しにできる、斜めに傾いたリーマーがすぐに導入してほしいものでした。(写真2)しかし、行く前に楽しみにしていたバルーンは見る事ができなかったのが本当に残念でした。

私は「ゼロポジションによるリバースにおける軟部組織バランス決定の有用性」と「腱板由来の疼痛の知見」の2つをプレゼンして参りました。英語で伝わるのか心配でしたが、受けが良くて沢山喋り

すぎってしまう事もあり、自信に繋がる良い経験でした。

この1ヶ月は大変濃密で、様々な出会いと刺激を頂きました。全てのホストの皆様へ感謝いたします。(写真3)そして、この様な素晴らしい機会を頂きました日本肩関節学会理事長の菅谷啓之先生、国際委員長の三幡輝久先生、そして国際委員の皆様、事務局の川村さんにこの場をお借りしてお礼申し上げます。最後に長谷川彰彦先生、ありがとうございました。これからも肩学会盛り上げましょう。



写真3

▶ 各委員会報告

雑誌「肩関節」編集委員会

委員長 佐野博高

雑誌「肩関節」編集委員会では、現在第47巻の発刊に向けて作業を進めています。第47巻には合計135編(昨年は156編)のご投稿を頂いており、内訳は、学术论文95編、原著・総説6編、症例報告13編、Proceeding 21編でした。この場を借りて、ご投稿下さった会員の先生方、査読にご協力いただいた代議員、査読委員の先生方に、改めて厚く御礼申し上げます。

4月5日と4月7日には、2日に亘ってWeb編集会議を開催し、初回査読において少なくとも1名の査読者がrejectすべきと判定した論文、原著論文として投稿された論文、術後経過観察期間が1年に満たない論文、審査の過程において担当委員が要検討と認めた論文等について、委員全員で審議を行いました。

審議の中で問題になったのは、本来学術集会発表論文や症例報告として投稿するのが妥当と思われる論文が、原著論文として投稿されていた事例が複数あったことでした。雑誌「肩関節」においては、原著論文については「学位論文を原則としますが、日本肩関節学会学術集会での発表論文で著者がしっかり書きたいと意思表示し、査読者・



編集委員会が学位論文と同等の内容であると判断した場合に投稿可能」と規定しています。今回原著論文としては内容的に不十分と判断された論文については、担当編集委員から主著者に投稿論文の種別について確認させていただくことになっていますが、会員の皆様におかれましても、今後原著論文としての投稿をお考えの場合は、事前に投稿規定を十分ご確認いただくとともに、指導医の先生ともよくご相談いただいた上でご投稿いただければ幸いです。

最後に、雑誌「肩関節」委員会では、投稿者の利便性を向上させるために、投稿規定やチェック表を随時改訂しています。本誌に論文を投稿される際は、日本肩関節学会の Web site (<https://www.j-shoulder-s.jp/entryrule/index.html>) で、最新の情報をご確認下さるようお願いいたします。

国際委員会

委員長 三幡輝久

2023 年 KSES Traveling Fellow として、広島大学の原田洋平先生と大阪医科薬科大学の長谷川彰彦先生が韓国の著名な先生を訪問されました。

訪問施設

- 1 Sang Hun Ko (Ulsan University Hospital)
- 2 Chang-Hyuk Choi (Daegu Catholic University Medical Center)
- 3 Jun Bum Kim (Soon Chun Hyang University Hospital)
- 4 Jong-Hun Ji (Daejeon St. Mary's Hospital)
- 5 Myung Sun Kim (Chonnam National University Hospital)
- 6 Young Lae Moon (YM Orthopaedic Hospital)
- 7 Yon-Sik Yoo (Camp 9 Orthopedic Clinic)
- 8 Sang-Jin Shin(Ewha Womans University Seoul Hospital)
- 9 Jae Chul Yoo (Samsung Medical Center)
- 10 Jin Young Park (Neon Orthopaedic Clinic)
- 11 Yang Soo Kim (Seoul St. Mary's Hospital)
- 12 Sae Hoon Kim (Seoul National University Hospital)
- 13 Young Kyu Kim (Gacheon University Gil Medical Center)
- 14 Joo Han Oh (Seoul National University Bundang Hospital)
- 15 Woong Kyo Jeong (Korea University Anam Hospital)
- 16 Kyu Cheol Noh (Hallym University Kangnam Sacred Heart Hospital)
- 17 Chris Hyunchul Jo (SMG-SNU Boramae Medical Center)
- 18 Yong Girl Rhee (Myongji Hospital)
- 19 KSES annual meeting

2024 年 ASES Traveling Fellow と 2024 年 SECEC Traveling Fellow の募集開始を学会ホームページならびに一斉メールにて案内しております。必ず貴重な経験になることは間違いありませんので奮ってご応募ください。

31st KSES international meeting(2024 年 3 月 28 日から 30 日) の 1st guest nation として日本が選出されました。日本からできるだけ多くの先生に参加してもらいたいと会長の Jae Chul Yoo 先生からメッセージをいただいています。演題募集が始まりましたら、多くの先生に応募してもらえますと有難いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。



高岸直人賞決定委員会

委員長 船越忠直

高岸直人賞決定委員会は、1987年より開始された『高岸直人賞』、2012年より開始された『Best Abstract』、2022年より開始された『国際論文奨励賞』の選考を行なっています。

『高岸直人賞』は優秀な若手肩関節外科医による学術論文に対する奨励賞であり、これまで数多くの著名な先生方が受賞されております。『Best Abstract』は毎年開催される学術集会のアブストラクトの中から選出され、本学会の公式英文機関紙である Journal of Shoulder and Elbow Surgery 誌に掲載されます。『国際論文奨励賞』は、第47回日本肩関節学会学術集会会長末永直樹先生の基金を元に、日本から世界へ情報発信するため、本学会の公式英文機関紙である Journal of Shoulder and Elbow Surgery 誌等への投稿を奨励するために設立されました。会員の皆様にはぜひ積極的に応募して頂くようお願い申し上げます。

高岸直人賞の対象論文は以下の通りです。

1. 当該年度の12月31日時点で満45歳以下の会員の発表論文であること、
2. 候補論文は当該年度の日本肩関節学会での発表論文であること、
3. 対象論文は update で魅力的で素晴らしい論文であること、
4. 高岸直人賞の審査対象論文は肩関節学会抄録集から選ばれてノミネートされた論文の中から、full paper 期限内に提出された論文とする、
5. 審査の対象となる論文は日本文、英文のいずれでも可とする、
6. 上記の条件が満たされた論文は雑誌「肩関節」、JSES 以外の雑誌に投稿しても可とする、
7. 審査対象はノミネートされた論文の full paper とする。

国際論文奨励賞については以下の通りです。

【国際論文奨励賞設立趣旨】

本賞は、日本から世界に情報発信するという第47回日本肩関節学会（末永直樹会長）のテーマを継承するため、日本肩関節学会の公式英文雑誌（Journal of Shoulder and Elbow Surgery 等）への投稿を奨励することを目的とする。掲載論文数に応じた奨励金を贈呈する。

【募集要項】

(I) 応募要件

国際論文奨励賞に応募できるのは、一般社団法人日本肩関節学会正会員または準会員1号であり、以下の条件をすべて満たす者とする

1. 1年間（8月1日より翌7月31日迄）で下記雑誌に3編以上掲載（アクセプトまたは掲載された日付を有効とする）されていること
2. 対象となる雑誌は以下のとおりとする。ただし、対象論文のうち少なくとも1編はJSESに掲載されていること
 - ・ JSES (Journal of Shoulder and Elbow Surgery)
 - ・ JSES International
 - ・ Seminars in Arthroplasty: JSES
 - ・ JSES Reviews, Reports & Techniques
3. 会員在籍期間に論文がアクセプトされていること



4. 本賞の採否決定まで継続して会員資格を有すること
 5. 肩に関する原著論文であること（症例報告、Review は対象としない）
 6. 応募者は筆頭著者であること
 7. Corresponding author は日本国内施設に在籍していること
 8. 肩関節学会学術集会での発表の有無は問わない
- (2) 奨励賞の額：論文3編 20 万円、論文4編 30 万円、論文5編以上 50 万円
 - (3) 募集期間：8月1日～翌年7月31日
 - (4) 応募方法：応募フォーム (<https://business.form-mailer.jp/fms/e0148224155840>) に対象論文（アクセプト日及び掲載日のわかるもの）を添付し、事務局へ送信する
 - (5) 選考方法：高岸直人賞決定委員会で審査決定する。再受賞はこれを妨げない
 - (6) 表彰：日本肩関節学会学術集会で理事長が表彰する
 - (7) その他
初年度の掲載対象期間は2021年8月1日より2022年7月31日までとする
募集要項は2年ごとに見直す

【問い合わせ先】

一般社団法人日本肩関節学会

事務局 / E-mail : office@shoulder-s.jp

社会保険等委員会

委員長 望月智之

2024年度診療報酬改定に向けた改正要望書の作成をし、2023年3月24日に外保連に提出を行いました。改正要望書を提出した術式は①肩腱板断裂手術（腱板断裂5cm未満、関節授動術を伴う）（関節鏡下）②肩甲骨烏口突起移行術③肩関節唇形成術（肩甲骨烏口突起移行術を伴う）（関節鏡下）の3つとなります。烏口突起では伝わりにくいため、あえて肩甲骨烏口突起という名称を使用することと致しました。この要望書が外保連を通じて厚生労働省に提出され、2023年7月頃に医療技術評価ヒアリングが行われる予定です。

外保連試案収載そして医療技術評価ヒアリングにおいて実態調査としての肩の手術アンケートは大きなエビデンスとなります。あらためて肩手術アンケートにご回答いただきました学会員の先生方に深く御礼申し上げます。アンケート結果はHPの会員サイトにアップしております。またアンケート結果を論文として、社会保険等委員会より雑誌「肩関節」に投稿しております。今後とも会員の皆様方のお力添えを頂きたくお願い致します。

教育研修委員会

委員長 後藤英之

教育研修委員では会員の皆様の肩関節診療に役立つ研修会やワークショップなどの教育活動を行っています。今年度からは新たな委員も加わりさらに充実したものとなるよう検討を加えていきたいと思っております。今年度の活動予定について報告致します。

第15回教育研修会については、第50回日本肩関節学会開催期間中の2023年10月14日（土）に開催予定です。内容は昨年度と合わせて今年度で一連の肩関節疾患の診断・治療について研修できるようプログラムを作成しています。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

第15回教育研修会(会場:京王プラザホテル)

2023年10月14日(土) 予定

教育研修講演1

演題1:肩関節周囲骨折の診断と治療

演題2:人工肩関節置換術の基礎と実際

教育研修講演2

演題1:肩のスポーツ障害の診断と治療

演題2:肩のリハビリテーション

また、日本肩関節学会キャグバーワークショップも感染防止対策を万全に整えた上で、開催準備をしております。併せて第7回日本肩関節学会手術手技フォーラムも開催を予定します。毎回参加者の方からはご好評を頂いています。ぜひ、ご参加下さい。

第7回 日本肩関節学会(JSS)キャグバーワークショップ

日時:2023年11月25日(土)~26日(日) 日程:2日間

会場:名古屋市立大学先端医療技術イノベーションセンター

募集人数:12名(予定)

研修コース:①関節鏡コース ②直視下手術人工関節コース 計6テーブル

講師:専任講師6名(予定)

第7回 肩関節疾患手術手技フォーラム

会期:2023年11月25日(土) 18:00~

会場:名古屋市立大学 会議室(JPタワー名古屋内 5階)

プログラム

- ・関節鏡視下腱板修復術 –最近のトピックスを含めて–
- ・関節鏡視下バンカート修復術 –コンタクトスポーツへの対処法も含めて–
- ・解剖学的人工肩関節置換術
- ・リバース人工肩関節置換術 合併症の予防を含めて
- ・製品紹介・企業広告

これからも皆様のお役に立てるよう活動して参ります。今後ともご指導、ご意見を賜りますようお願い致します。

学術委員会

委員長 藤井康成

学術委員会の活動報告としては、現在二つの研究企画が進行中です。

一つ目は、肩関節学会員を対象とした腱板広範囲断裂に対する手術療法に関するアンケート調査です。昨年度肩関節学会員の皆様のご協力で、350件近い回答を回収することができました。現在、アンケートの集計も終了し、結果報告を近日中に行う予定としております。

また、本調査は、腱板広範囲断裂に対する手術療法の経年的動向を探る意味で、今後も継続的に実施する予定にしております。次回の本調査に関しましてもご協力を賜りますようお願い申し上げます。

リバース型人工肩関節置換術の本邦での中長期成績が徐々に明らかにされていくと思います。その結果により、次



回以降の本調査の結果が如何なる影響を受けるか、本調査を通して明らかにしていきたいと考えております。

二つ目は、腱板脂肪変性の評価に関する調査です。日本の肩関節外科医を対象に、MRI 画像における Goutallier 分類の信頼性を確認するため、現在、MRI 画像ファイルのデータ作成を行い、各サンプルの定量評価結果との整合性を評価すべく、データのファイリングを進めている段階です。調査用のテンプレートができ次第、委員会内でトライアルを行う予定としております。

例年と同じく、第 97 回日本整形外科学会学術総会の事務局よりシンポジウム案作成の依頼があり、数演題を理事会に提出し、以下の 2 演題を事務局に提出致しました。

第 97 回日本整形外科学会総会

- ・肩関節外科における手術手技の変遷と推奨する術式
- ・リバー型人工肩関節置換術の成績向上のために

次年度は、新しい調査の立ち上げも行い、少しでも興味ある調査を発案し実行できますよう、委員会一丸となって邁進する所存であります。今後とも学術委員会活動に対しまして、会員の皆様の益々のご厚情ならびにご協力を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

広報委員会

委員長 夏 恒治

これまで委員長として尽力されてこられた北村歳男前委員長の後任として 2022 年 11 月から夏恒治が委員長を務めさせていただきます。

ニュースレターの 3 つの新企画とホームページのリニューアルなどの前年度からの引き継ぎ案件も多数あるため、北村歳男前委員長(現理事)には引き続きアドバイザーに就任していただき、助言をいただきながら運営を行なっています。

2022 年度は例年通りの年 2 回のニュースレター発刊(19 号、20 号)を行いました。2023 年度も引き続き年 2 回のニュースレター発刊を行う予定ですが、課題としては 19 号が 38 ページという大変読み応えのあるものになったこともあり、少しボリュームを減らすことも必要ではないかと考えています。そこでいくつかの企画を新ホームページに移行することも検討しています。今後もより多くの方に読んでいただけるニュースレターになるよう務めていきますので、ご意見、ご感想などありましたらよろしくお願い致します。

2022 年度の最大の活動は学会ホームページのリニューアルです。

2023 年 3 月にオンラインで 3 社によるコンペティションを行い、先日委託先が決定しました。現在スケジュール調整に入っており、2023 年度内には新ホームページをみなさまにお披露目できるように進めておりますので、ご期待ください。新ホームページでは会員のみならず非会員の医師やスタッフに日本肩関節学会の魅力や、会員数増加につなげることを目標の一つに掲げていますが、一般の方へも学会や肩関節疾患に関して積極的な情報発信をしたいと考えています。みなさまからのご意見、アイデアをいただけたらと思いますので、よろしくお願い致します。

財務委員会

委員長 酒井忠博

この度、日本肩関節学会財務委員長を拝命致しました酒井忠博でございます。学会の財布を預かる重要な任務に、身が引き締まる思いでございます。担当理事の橋口 宏先生、アドバイザーの岩堀裕介先生、外部アドバイザーの柄澤 徹先生、前委員長の中川滋人先生に御指導を頂きながら、経験豊富な委員の皆様のお力をお借りして、出来る限り財務の改善に尽くしたいと存じます。



前委員長の中川滋人先生からの引き継ぎになりますが、当面の大きな問題として、2022年に入ってからの急激な円安の進行により、JSES購読料の支払額が大幅に増加することが挙げられ、財務の悪化が懸念されます。正会員、準会員1号の年会費15,000円にはJSESオンライン購読料が含まれており、円安による差額により年額400万円程度が学会からの持ち出しとなると予想されております。今後このような円安が長期化すれば、新規事業に充てる予算捻出のために年会費値上げを考慮せざるを得なくなると考えております。財務委員会としては引き続き、役員・代議員の各種会議のWeb開催を奨励するなど、経費節減の努力をして参りますので、会員の皆様方におかれましては御理解、御協力を御願いたしますと共に、財務改善のため、さらなる会員増加に御協力頂けますよう、よろしくお願い申し上げます。

リバーズ型人工肩関節運用委員会

委員長 山門浩太郎

RSA運用委員会では、ガイドライン適用についての相談をお受けしています。「判断に迷う場合はRSA運用委員会に相談する」と記載があるとおり、あくまでも相談であり許認可決裁をおこなうわけではありませんので、症例相談と考えていただければと考えます。

ご質問としては、年齢に関連する内容が最多となっています。ガイドライン改訂以前における年齢制限が、ほぼ一律に、また厳格に70歳以上と記されていたことが、皆の記憶に焼き付いているためかと思いますが、現在のRSAガイドラインにおいては年齢による使用制限はかなり緩和されております(原則として65歳以上)。リウマチ肩や腫瘍症例、あるいは人工関節再手術例などでは年齢制限はありませんし、腱板断裂についても一律に「禁忌」とはなっておらず、再断裂症例といった他の手術方法での機能改善に困難が予測される症例におけるRSAの使用は術者の裁量に任されております。「慎重に適応を検討する」ことが求められますが、65歳未満であったとしても年齢だけを理由にRSAを回避しなければならないわけではありません。

具体的な相談方法ですが、肩関節学会事務局のoffice@shoulder-s.jpあてに、該当の症例についての症例検討等をおこなう形式のスライド(パワーポイントあるいはPDF)を作成して送っていただいています。もしも動画が含まれている場合は、ファイルサイズの制限のため受信が難しいことがありますので、動画があることをメール内にご記載ください。また、ご相談者がどのような術式を望んでいるかについても必ず記載をお願いしています。事務局に届いた相談案件は、担当理事と委員長で内容を確認のうえ、委員会の先生方に意見をうかがっています。回答期間はおおむね1週間から10日ほどですが、手術の予定日がさしまっているなど特段の事情があれば可能な限り対応しています。

日本肩の運動機能研究会運営委員会

委員長 船越忠直

肩の運動機能研究会は、2003年に第30回日本肩関節学会の高岸憲二会長が『肩フォーラム in 群馬』を同時開催し、2004年の第31回日本肩関節学会の筒井廣明会長が初めて『肩の運動機能研究会』を開催され始めました。その後参加者数は飛躍的に増えましたが、会員登録の制度がない、事務局が不在、研究会での発表をデータベースに登録することが不可能、雑誌への投稿ができないなど様々な問題点がありました。

そこで、2016年に中川照彦先生、浜田純一郎先生、村木孝行先生を中心とするワーキンググループが発足し、



2019年10月に日本肩の運動機能研究会（以後研究会）として正式に承認されました。研究会は独立した団体ではなく日本肩関節学会内の一組織であり、研究会会員は日本肩関節学会会員（正会員、準会員1号、2号）で構成され、研究会運営委員会により運営され、実務は研究会世話人会が行います。研究会運営委員会では、将来的に研究会がさらに発展し、様々な形で記録として掲載できることを目標に会則修正を行っております。現在の問題点として準会員2号の入会条件の明確化、世話人会の整備などがあり、日本肩関節学会理事会、代議員会と綿密に連携し問題点を解決したいと考えております。

研究会は今後世界のセラピストとも連携します。本年（2023年）ローマで開催される国際肩肘学会（ICSES）では第7回国際肩肘セラピスト学会（ICSET）が併催されます。しかし、ICSETの開催母体がなかったために、今回の開催が不透明でした。そこで国際肩肘セラピスト学会連合（ICSSSET、<https://www.icssset.org/>）が設立され、ICSETの母体組織が形成されたことで今後継続開催が可能になりました。ICSSSETは設立国である日本、ヨーロッパ、オーストラリア、アメリカ合衆国の4か国における肩、肘関節専門のセラピストが所属する団体で構成されています。日本からは当研究会がICSSSETの趣旨に賛同し、村木孝行先生が代表として参加することになりました。改めてご支援いただいた理事会や各委員の皆様にはこの場を借りて御礼申し上げます。今後はICSETの運営に加え、ICSSSETを中心としたセミナーや教育ツールの提供など国際交流の活性化も期待されます。

より多くの会員の皆さんに研究会及びICSETで発表して頂けるように邁進して参りますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

【日本肩の運動機能研究会世話人】*敬称略

村木孝行、立花 孝、甲斐義浩、高村 隆、千葉慎一、
三浦雄一郎、宮下浩二、山崎 肇、遊佐 隆、河上淳一

選挙管理委員会

委員長 田崎 篤

2023年度の活動予定として、代議員選挙および第53回学術集会会長選挙を行います。選挙案内や候補者等の連絡は、随時会員サイトに掲示します。

1. 代議員選挙について

代議員選出規則に基づき、下記の要領で選挙を実施する予定です。

- ・2023年6月に公示を行い、7月に公募する。
- ・2023年8月以降から10月の第50回学術集会までの然るべき時期にWebで信任投票、専任投票を行う方向で検討している。
- ・当選人を第50回学術集会時の社員総会で発表する。

2. 第53回学術集会会長選挙について

定款第39条に定める学術集会会長について、学術集会会長選挙規約に基づき、以下の要領で選挙を実施します。

- ・2023年6月に公示を行い、7月に公募する予定である。
- ・2023年8月以降から10月の第49回学術集会までの然るべき時期にWebで投票を行う方向で検討している。
- ・第50回学術集会時の社員総会で当選人を決定して、発表する。

以上



50年史編纂委員会

委員長 国分 毅

第51回日本肩関節学会学術集会に合わせて公開される日本肩関節学会50年史作成の進捗状況を報告させていただきます。

50年史は、40年史と同様に日本肩関節学会ホームページ上での公開となります。現在の40年史のサイト名を50年史と変更いたしますが、40年史に掲載の文章はオリジナルとして50年史サイトに残し、新たな10年での出来事（日本肩関節学会の社団法人化、日本肩の運動機能研究会の発足、リバーズ型人工肩関節置換術の本邦への導入など）をフォーカスした新しい内容を組み込んでいくことになります。今後、原稿の執筆依頼を順次行う予定ですので、御寄稿の依頼が届けられました会員の先生方におかれましては何卒よろしくお願い申し上げます。

また、前号のNewsletterでご報告いたしました日本肩関節学会50年史年表も概ね出来上がっており、第50回学術集会で公開できる目途が経ちましたので、皆さま楽しみにお待ちください。

用語委員会

委員長 佐野博高

用語委員会は2022年に発足した新しい委員会で、田中 栄担当理事、今井晋ニアドバイザーのご指導の下、委員8名の体制で、肩関節に関わる医学用語の定義や正しい使い方について検討を行っています。

さて、当委員会では発足後最初の検討課題として、肩関節可動域測定法の改訂案作成に取り組んでいます。会員の先生方もご承知の通り、現行の「日本整形外科学会、日本リハビリテーション医学会制定・関節可動域表示ならびに測定法」には、椎体番号を用いた肩関節内旋可動域の測定法や肩関節屈曲90度（いわゆる3rd plane）における内外旋角度の測定法が記載されていないなど、実際の臨床に十分即していない点が複数みられます。今回の改訂では、これらの表示・測定法を追加記載するとともに、内転角度の表示・測定法についても修正を行う方針です。本年度中には会員の先生方に修正案を公開して広くご意見を募り、それらを基に更に検討を加えた上で、日本肩関節学会による改訂案としてまとめていきたいと考えています。

また、当委員会では、現在会員の先生方が定義や使用法について疑問お感じになっている肩関節に関する医学用語を募集しています。ご応募いただいた用語の中から審議対象を選定し、調査・検討を行っていく予定です。審議内容については正確な用語使用の促進に貢献すべく、日本肩関節学会のweb siteやニュースレターなどを通して、会員の皆様に随時フィードバックしていきたいと考えています。当委員会に検討を希望される用語がある場合は、7月31日までに以下のWeb siteにおいてご提案いただければ幸いです。

回答 URL: <https://business.form-mailer.jp/fms/8d154dde197997>

最後になりましたが、これからも当委員会の活動をご支援・ご協力くださいますよう、改めてお願いいたします。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

Newsletter

▶ 事務局からのお知らせ

2022年度の会期（2022年8月1日～2023年7月31日）があと1か月ほどで終了し、2023年度の会期となります。この便りを書いているのは5月末ですが、これから2022年度の年会費の再請求書の作成や、2023年度の会期に向けて作業を進めております。

また世情もだいぶ落ち着いており、2022年9月には SECEC への Fellow 派遣、10月には ASES への派遣そして2023年3月には KSES への Fellow 派遣が再開されました。また2022年10月には KSES からの Fellow も来日し、現在は10月に来日する SECEC の Fellow とのやり取りが始まりました。現在、2024年の ASES、SECEC への派遣募集も行っています。

過去のニュースレターで帰朝報告を掲載しておりますので、興味がある先生は是非、ご確認ください。

編集

広報委員会

後記

美船 泰

ニュースレター第20号を最後までお読みいただきありがとうございます。皆様のお力添えをもちまして、本号も大変充実した内容となりました。担当理事の田中先生、夏委員長、事務局の川村さん、広報委員会の先生方、そしてご執筆いただきました全ての先生方に厚く御礼申し上げます。本号の「肩関節外科医を志す人たちへ」では尾崎二郎先生にご寄稿いただきました。珠玉の文章に込められた肩関節の魅力についての金言は是非ご精読いただきたいと思っております。冒頭において、菅谷啓之理事長ならびに池上博泰先生も述べられていますように、新型コロナウイルスが感染症法上「5類」に移行され、学会活動や国際交流が戻りつつあります。しかし全世界を襲ったこのパンデミックは社会に多くの変化をもたらし、生活・労働環境の変化は人々の心や行動にも大きな変化をもたらしています。目まぐるしく変化する世の中だからこそ、こうして偉大なる先人の金言に触れることが必要だと感じます。コロナ禍前と同様に、制限のない学術集会在開催される10月を心待ちにしております。



一般社団法人

日本肩関節学会

Japan Shoulder Society

編集：一般社団法人日本肩関節学会広報委員会

田中栄（担当理事）、夏恒治（委員長）、新井隆三、大前博路、梶博則、梶山史郎、土屋篤志、西中直也、堀籠圭子、美船泰、三宅智、村成幸、望月由、北村歳男（アドバイザー）

発行：一般社団法人日本肩関節学会

〒108-0073 東京都港区三田 3-13-12 三田 MT ビル 8 階株式会社アイ・エス・エス内

TEL03-6369-9981/FAX03-6369-9982

E-mail office@shoulder-s.jp URL :<https://www.j-shoulder-s.jp/>